



## イベント報告 -ウッドランドクラブ6月- ～カブトムシの飼育講座～

6月7日(日)は、朝から良い天気めぐまれ、絶好のイベント日和となりました。参加された子供たちや保護者の方々は、カブトムシの一生や飼育方についての説明を熱心に聞き入っていました。子供たちは、土の中から幼虫を探し当てて、大きな歓声をあげていました。

今年は、幼虫が例年に比べて少ないようでしたが、見つけた幼虫は大切に持ち帰りました。無事に育ち、成虫となってくれることを願っています。



＜カブトを探すぞ!!＞



＜いた、いた!!＞

## ～藍染め～



＜川で洗い流す…＞

作品はそれぞれに個性的で、世界にたった一つのものとなりました。これからも、今回と同じ「藍染め」や「一閑張り」などの特別イベントが実施されるのをお楽しみに…。

7月4日(土)、特別イベントで「藍染め」が開催されました。参加者は、指導された講師の先生の指示通りに作業を進めていきました。近くの「草木川」で洗う作業は、流されないように皆さん必死でした…

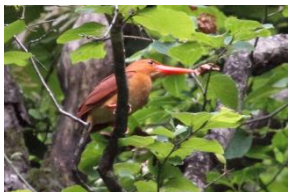


＜よくできました!!＞

## こもれびの森の かわいいことりたち

こもれびの森サポーターで専属ことりカメラマン(?)の友大さんのコーナーです

### 火の鳥!!!



＜アカショウビン①＞

火の鳥ともいわれるアカショウビンをついに撮影できました。野鳥愛好家の中では憧れの鳥の代表格です。科学館スタッフの情報と1ヶ月ほどの観察から目星をつけていました。午前11時と午後4時前後の小雨や曇り空の時によく鳴きます。

この日も11時過ぎ、例のところで鳴き声が聞こえます。忍び足で慎重に

近寄ります。声を立てずに叫びました? 「やった、おーきれい、愛嬌あるね、いいぞ・・・」

何しろ見るのも初めてです、興奮で手振れなどしないよう慎重にシャッターを押しました。



＜アカショウビン②＞

6月号で紹介したキセキレイの子育ては、親鳥がとても神経質で人の姿を見ただけで給餌を見合わせます。ヒナが心配だったので撮影するのは控えました。6月26日、無事巣立ったようです。(大友)

## ミツケ! こもれびの森 こもれびの森でみつけたよ

山のことなら何でもプロ級、サポーターの(は)さんのコーナー

### どこかで子育てを…

科学館の向のハンノキにコガタズメバチが巣を作った。巣はトックリを逆さにした形。これは外敵の侵入防止や巣内の保温防止のためといわれる。巣は木の皮をかじり取って唾液と混じり合わせて作られている。材料が違うから貝殻模様となっていてチョッピリ芸術的。

でも、この巣はなぜか翌日に大部分が落ちてしまった。残された巣では女王バチが懸命に働きバチを育てていた。

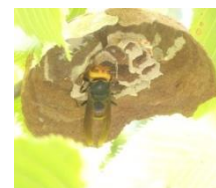
3日後、巣は再生された。それから3日後、巣はもぬけの殻となった。女王バチがどこかで子育てをしていることを念じた。(は)



＜①見事な逆さトックリ＞



＜②落ちた巣＞



＜③子育ての女王蜂＞



＜④再生された巣＞

## まめちしきコーナー “花や木などのチョットした知識”

### ～「名前の由来」～ …「イボタノキ」…

「イボタノキ」は、名前のとおり「イボ」を連想させる木です。かつては「イボトリノキ」と呼ばれていたようで、漢字では「疣取木」とも表記します。

各地の雑木林などで普通に見られますが、花が咲かないと分からないような地味な樹木です。この木から採取される「イボタノキ」は、高級な蠟として知られ、家具の艶出しや障子のスベリをよくするワックスとして利用されています。また、溶かした蠟を患部にたらしてイボをとるといって、イボ取りの生薬(生薬名:虫白蠟<ちゅうはくろう>)として利用されていました。

しかし、「イボタノキ」も「虫白蠟」も、この木の樹皮に寄生する「カイガラムシ」の仲間「イボタノキ」が分泌するロウ物質から作られています。つまり、木についた虫にまつわる名前がつけられています。木そのものは材がきめ細かいことから器具材などに使われ、「イボ」とは全く無関係なようです。

純白で可憐な花に、「イボ」は似合わないのですが…本人はどう思っているのでしょうか?(千葉)



＜イボタノキ＞  
モクセイ科  
落葉広葉樹

### 雑記

“薫風”青葉の香りを吹きおくる初夏の風だそうです。いつの間にか梅雨に入り、気が付くと連日の猛暑です。木の葉の間をすり抜けて吹くさわやかな風が嬉しいこの季節です。先日テレビの番組で、私達人間の祖先ホモサピエンスとは別のネアンデルタール人が、約4万年前に絶滅したと語っていました。体格も脳も大きいネアンデルタール人の滅亡は、十分な言語能力がなかったからと推定され、ホモサピエンスとの違いはこの言語能力をつかさどるDNAの文字ひとつの違いということが解ったとのことでした。平安時代から面々とつながる文学の世界や、生活の中で自然と係わる豊かなことばが急速に少なくなっている一抹の寂しさとともに、いにしえの美しい言葉や、いにしえ人のこころに寄り添いたいと感じるこの頃です。

宮城県こもれびの森「森林科学館」(山本)